

聖隷クリストファー大学
社会福祉学部



福祉・教育

エッセイ

コンテスト

作品募集



聖隷クリストファー大学は、
福祉・介護・教育・子どもにかかわる方々を応援するため、
福祉・教育エッセイコンテストを実施しています。
「福祉や介護がある風景」、「教育のなかでの出来事」、「子どもとのふれあい」、
国籍などの異なる人々がお互いの文化的な違いを認め合い、
対等な関係を築こうとしながら地域社会で共に生きていく「多文化共生」、
「誰もが自分らしく生活できる社会」など、エッセイに表現して、ご応募ください。

募集締切

2021
9/21(火)

募集要項 ※応募方法・注意事項等は裏面をご覧ください。

テーマ 6つのテーマから自由にご選択してください。
「福祉」「介護」「教育」「子ども」「多文化共生」「誰もが自分らしく生活できる社会」

規格 文字数などの指定はありません。

賞

最優秀賞(一般部門1名・高校生部門1名)
優秀賞(一般部門2名・高校生部門2名)
特別賞(10名)
※受賞された方には記念品(大学グッズ等)を贈呈します。

部門 高校生部門、一般部門

発表 10月20日(水)「県民福祉の日」に、聖隷クリストファー大学ホームページにて発表します。

お問い合わせは
[入試・広報センター]へ

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

TEL 053-439-1401 HP <https://www.seirei.ac.jp>



保健医療福祉の総合大学

聖隷クリストファー大学



聖隷クリストファー大学介護福祉専門学校

応募方法

郵送、メール送信(ファイル添付)のいずれかからご応募ください。応募の際には下記①～⑦を明記してください。

①郵便番号・住所 ②氏名 ③電話番号 ④メールアドレス ⑤職業(福祉・介護・教育従事者の方はその施設・事業所・学校名・職種、児童・生徒の方は学校名・学年を明記してください。) ⑥部門 ⑦作品タイトル

応募先

郵送による
応募の場合

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

聖隷クリストファー大学 入試・広報センター 福祉・教育エッセイコンテスト係 宛

メールによる
応募の場合

cl-entrance@seirei.ac.jp

※メールの件名を「福祉・教育エッセイコンテスト作品応募」としてください。

注意事項・ その他

●インターネット接続料、通信料など応募にかかる費用については、応募者ご自身の負担となります。●応募作品の法律上の著作権(著作権法第27条および第28条に規定する権利を含む)・出版権、広告・印刷物・その他制作物(DVD、大学案内等)への使用権は聖隷クリストファー大学にすべて帰属します。●応募作品のあらゆる権利は聖隷クリストファー大学では一切の責任を負いかねます。応募に際して、必ず権利者の了承を得てください。●応募作品は返却いたしませんので予めご了承願います。●入賞作品については、氏名等を含めて聖隷クリストファー大学制作のホームページ、印刷物などに掲載します。●応募の際にお知らせいただく個人情報は、本件に関する諸連絡のために利用します。●コンテストへのご応募をもって、上記に同意していただいたものとみなします。

〔 2020年度 最優秀賞作品 〕

■高校生部門「小さな勇氣」(飯田 美咲さん)

「前の席空いていますよ。」その日私は初めて、自分から視覚障害者の方に話しかけた。

毎朝電車で見ると二人の男性は、いつも同じ電車の同じ号車に乗っている。彼らは白杖を持って視覚に障害があることが窺えるのに、雨の日も風の日も毎日ぴったりにホームにつくのだ。駅員の力も借りず電車に乗るのを初めて見たときは、実は目が見えているのではないかと思ったほどである。

そうしていつもと同じ電車に乗ったある日のことだ。彼らの近くの優先席が二席空いていた。しかし、彼らが気づく様子にはなかった。近くの人が、空いた席と彼らを交互に見る姿を見た私は腹が立った。なぜ誰も話かけないんだらうと思った。だがふと、じゃあ私は何で彼らに話かけないんだらうと自分の行動を棚に上げていることに気づいた。よし、話しかけよう勇氣を出すんだ!そうして私は「前の席空いていますよ。」と。彼らは「ありがとうございます」と。席についた後、座れてよかったねと話し合う彼らは、メガネをしていたが口元は優しく笑っていた。

誰だって知らない人に話しかけるのは勇氣のいることだ。だが、少しの勇氣は素敵な笑顔につながる。私は将来、障害のあるなしに関係なくみんなが笑顔になれる世界をつくるのに貢献したいと思った。

■一般部門「餃子と車椅子」(清水 将一さん)

人生にはもう二度と会わない出会いもあり、相手の名前すら知らない出会いもある。

たった一度の出会いが、生涯忘れられない出会いとなることもある。今回はそんな出会いの話である。

私たち夫婦が宇都宮に着いたのは21時近くだった。餃子を食べようと駅前の店に入ることにした。ところが半分の店が閉店。僅かに開いていた店の一つに入ろうとしたが、数段の段差が待ち構えていた。私は杖を頼りに段差を登り入り口に着いた。その時店の奥から三人の店員が出てきて、折りたたんだ車椅子を持ち上げ店内に運んでくれた。

そこまでは何度も経験した。私が感激したのはこれから会計を済ませようと立ち上がった時、それを見た店員が持ち込んでいた車椅子を私のところまでさっと持って来てくれた。

段差があるので下まで杖で歩いて行くと伝えると、「ぼくたちで担ぎます」。三人で数段の段差を担いで降ろしてくれた。その対応が素早かったので車椅子介助は慣れているのかと思ったが、三人とも折りたたんだ車椅子の上げ方も分からず戸惑っていた。上げ方を教えると歓声をあげていた。段差を担いで降りるのも正直少々怖かったが、それ以上に三人ともすがすがしく嬉しそうな笑顔である。若者のさわやかな笑顔は私たち夫婦の心をほんのり温かくしてくれた。客だから仕方なく介助しているという雰囲気は微塵もなく、むしろ楽しんでさえいるようだった。介助の学生ならともかく、車椅子操作を全く知らない若者が何の躊躇もせず介助の行動に出る。こんな経験は車椅子生活でも初めてだった。私は嬉しい気持ちと共に、三人のさわやかな笑顔の意味を考えた。

○力を入れて段差を降りた充実感 ○客へのサービスの達成感 ○私たち夫婦の喜ぶ顔を見た満足感

そのどれも当たっているように思うが何か違う気もした。そこで私は次のように理解した。それは一言でいうと「福祉の気持ちの実行の充実感」である。少し説明が必要だと思う。

人は福祉の心が大切だという。福祉教育論においても昔から言い続けられてきた。しかし心は見えない。子どもたちに見えないものを伝えることは容易ではない。福祉の心を理解するとは情緒的理解である。社会福祉が実践科学である以上、情緒的理解にとどまってはならない。福祉の情緒的理解に対して、実行的理解というものがある。それは想定する気持ちは行動となって見える化するというもの。先の三人の店員さんは介助しようという気持ちが行動となって現れた。福祉の心があっても福祉の気持ちがなければ、先の行動にはつながらなかっただろう。街に出ると沢山の親切に出会うが、今回の親切ほど嬉しい出会いは初めてであった。お仕着せがましくもなく、恩着せがましくもない福祉の気持ちの現れであった。

三人の店員さんは車椅子利用者へのやさしい対応などすっかり忘れてのことだろう。しかし私たち夫婦には、あの時の餃子の味と三人のさわやかさが忘れられない。